平成元年度厚生省心身障害研究
「新生児期・乳児期の生活管理のあり方に関する総合的研究」

極小未熟児の授乳とくに退院前後の授乳量について

（分担研究：新生児・乳児の栄養管理に関する研究）

研究協力者　志　村　浩　二

要　約：極小未熟児（ＡＦＤ児）とはいえ、ボトル授乳が確立される頃から急激に授乳量が増加した。しかし、catch upといえる体重増加ではなく、合併症ない場合、より早期からの授乳量増加が早期退院を可能にすると思われる。

見出し語：極小未熟児、授乳量、退院時期

研究目的：極小未熟児を外来でFollow upしていると、退院後急激な体重増加を来す児をみる。そこでＮＩＣＵ退院前後の極小未熟児の授乳状況を検討し、適正な授乳指導の資料としてみたい。

対　象：生後24時間以内に入院し、重篤な奇形・消化管手術をみずに生存退院し、１カ月以上外来で追視できた出生体重1500g未満のＡＦＤ児。

方　法：対象児の入院・外来カルテから、周産期情報、主要疾患、治療内容、身体発育値、授乳量、主な合併症を抽出、１日当りの体重増加・授乳量を算出、さらに乳幼児身体発育曲線と比較、検討する。

結　果：対象52名の平均在胎週数は27.7±1.8週、出生体重は1098.4±224gであった。

結果は表にみるように、ボトル授乳が確立される退院１カ月前頃から有意に授乳量、そして体重が増加し、退院１カ月後の外来受診時には平均194.5±29.8ml／kg／dayの授乳量と著しい増加をみた。

各時期の体重を仁志田らの胎児発育曲線値、乳幼児身体発育値と比較すると、退院１カ月前は－2.3SD、退院時は－1.1SD、そして退院後１カ月時は３パーセンタイル値に相当し、退院後の著しい体重増加にも拘らず、catch upといえるレベルには至らなかった。

この傾向は1000g未満児、それ以上の児の差なくみられた。

長期酸素投与例についてみると、より未熟で、人工換気の長期化を見、さらに体重増加も有意に少なかった。１日あたりの授乳量は逆に酸素長期投与群に多く、エネルギー消費が著しく、効率の悪いという結果を示した。

その他、経産婦が初産婦に比し授乳量が有意に多く、また主治医による指示量の差もみられた。いずれも、入院中に少なく抑えられていた

静岡県立こども病院：Shizuoka Children's Hospital.

児の授乳量が、退院後急増しているが、体重増加の点では、退院後も授乳量に変化をみなかった児も含め、有意差をみなかった。

なお、最高1日246㎖／kg授乳していた児も含め、著しい吐溢乳、さらに誤嚥した児はみなかった。

結 語： やはり退院時著しい授乳量の増加をみた。とくに入院中に比較的少ない量に抑えられられていた児に著しい傾向をみた。しかしながら、正常発育へのcatch upをみるには至らなかった。

またボトル授乳を遅らせる、長期酸素投与を要する病態は、十分な授乳量にもかかわらず体重増加を抑えていた。

反復する無呼吸、ＢＰＤといった長期酸素投与を要するような病態のない児にあっては、極小未熟児とはいえ、より早期からの状態に見合った授乳量の増加が、より早い体重増加をもたらし、早期退院、母子結合の強化を生むと思われる。

極小未熟児の授乳状況

N＝52

退院前	在胎週数　w	38.3 ± 4.1
	体　重　g	2087.8 ± 364.2
1カ月	増加体重　g／D	13.4 ± 3.3
	授乳量㎖／kg／D	147.8 ± 18.1
退院時	在胎週数　w	42.5 ± 4.0
	体　重　g	2873.7 ± 373.7
	体重増加　g／D	26.6 ± 4.8
	授乳量㎖／kg／D	165.6 ± 17.9
退院後	在胎週数　w	46.8 ± 4.0
	体　重　g	3954.5 ± 458.6
1カ月	体重増加　g／D	36.2 ± 9.2
	授乳量㎖／kg／D	194.5 ± 29.8

P＜0.010

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:極小未熟児(AFD 児)とはいえ、ボトル授乳が確立される頃から急激に授乳量が増加した。しかし、catch Up といえる体重増加ではなく、合併症ない場合、より早期からの授乳量増加が早期退院を可能にすると思われる。